

2004年津波被災後のタイ南部・アンダマン海沿岸ビーチリゾートにおける幽霊をめぐる混乱と観光復興

The Issue of the Belief in Ghosts and Tourism Recovery Process
in the Aftermath of the 2004 Tsunami Disaster at Andaman Sea
Beach Resorts in Thailand

薬師寺 浩之*

要 旨

2004年12月26日にタイ南部・アンダマン海沿岸のビーチリゾートを襲った津波被災からの観光産業の復興においては、タイ人の間で共有された幽霊出没に対する恐怖心が大きな障害となった。特に、旅行中の不幸によって亡くなった欧米人観光者の幽霊は、恐怖の対象となった。さらに当地の主要マーケットであるアジア諸国に住む仏教徒の人々は幽霊の存在を恐れ、復興後も被災地域を訪れることを避け続けた。タイのみならず多くの仏教国で見られる独特な精霊信仰が、このような現象の背景にある。被災地復興の舵取りをしたタイ政府は、被災者の心情や人々の幽霊に対する恐怖心の深刻さを無視した復興を行ったとして批判された。このように災害復興におけるもたつきは、災害それ自体に対する反応であると同時に、社会文化的に構築された反応の結果でもある。災害復興過程における被災地の社会・文化的構造がもたらす影響は重大であるが、今までの災害研究でこの点は見過ごされていた。そこで本稿では、2004年津波被災後のアンダマン海沿岸ビーチリゾートにおける仏教徒（主にタイ人）の幽霊に対する混乱と、それがもたらした観

* 立命館大学文学部地理学実習助手

光復興への影響について考察する。

Abstract

The issue of ghosts was a significant obstacle in the recovery of the Andaman Sea beach resorts in Southern Thailand from the 2004 tsunami disaster. Many Thai people were scared to live in and enter the resorts because they believed that large numbers of ghosts of foreigners who had died on holiday still inhabited the area. The Buddhist spirit worshippers, whose beliefs had been inherited from ancient times, provoked this panic. The Thai government was criticized for its rehabilitation and reconstruction plans, because it ignored the fears of those (including many Asian tourists) who thought that, when returning to the resorts, they would be haunted by these ghosts. This suggests that reactions to disasters are often socially and culturally constructed. The social and cultural characteristics of the disaster-hit regions are frequently ignored in attempts to understand the recovery process for the tourist destinations. Therefore, this paper aims to explore the widespread belief in the existence of ghosts in the aftermath of the 2004 Tsunami disaster at the Andaman Sea beach resorts in Thailand. It attempts to understand how the rehabilitation and reconstruction of tourism in Thailand was hindered by such deep-rooted beliefs among local people and Buddhist Asian tourists.

キーワード：津波被災、観光復興、死、幽霊、精霊信仰、タイ

Key words : tsunami disaster, rehabilitation and recovery of tourism, death, ghost, spirit worship, Thailand

1. はじめに

2004年12月26日(日曜日)、インドネシア・スマトラ島北西沖160kmのインド洋で発生したマグニチュード9.1の地震(スマトラ島沖地震)後に発生した津波(インド洋大津波)によって、タイ南部・アンダマン海沿岸のビーチリゾートは大きな被害を受けた。主要マーケットである欧米諸国のクリスマス休暇の時期であり、さらに一年で最も過ごしやすい乾季であったため、津波被災時のタイは観光のピークシーズンであった。それゆえに、タイ国内の全死者数に占める外国人(そのほとんどは欧米諸国からの観光者)は45.2%(全死亡者数:5,395人、外国人死亡者数:2,436人)、全行方不明者数に占める外国人は31.8%(全行方不明者数:2,817人、外国人行方不明者数:896人)という、他国の被災地では見受けられないほど国際的な様相を呈した(Sharpely 2005; Nidhiprabha 2007)。被災から10日程経った2005年1月初旬には、幽霊の目撃談や心霊体験談が被災民、非被災民間わず、一部のタイ人によって語られ始めた(Cheng 2005)。その後、連日マスメディアが報道する大災害に関する事実と悲観的で感情的な報道が相まって、幽霊の出没に関する話が大きな議論となり、また噂となって広がった(Rittichainuwat 2011)。旅行中の不幸によって亡くなった欧米人観光者の霊は、タイ人被災者の霊以上に心霊体験談に頻繁に登場したという(Barton 2005)。幽霊、特に欧米人観光者の幽霊に関する噂は被災したタイ人を恐怖に陥れ、恐怖心は被災復興の大きな障害要因となった。第2章で詳細に述べられるとおり、復興の大きな障害となる程までに幽霊の出没を多くのタイ人が信じた背景には、タイ仏教における独特な精霊信仰がある。

このように迷信深い国民性の人々が住む国にある国際的に有名なビーチリゾート地で、さらにピークシーズンに起きた津波被災であったが故に、欧米人観光者の幽霊の目撃談は瞬く間にタイ全土に広がり、それは被災したビーチリゾートの復興に大きな影響を及ぼした。さらに、中国、台湾、香港、

シンガポールなどアジア諸国の人々は幽霊の存在を恐れ、復興後も被災したビーチリゾートを訪れることを避け続けた(Henderson 2005; Lovgren 2006)。幽霊出没に対する恐怖心は、タイにおいて復興の重大な障害要因であったにも関わらず、この現象が日本や欧米諸国のメディアにおいて報道されることはほとんど無かった。さらに、この現象がもたらした復興への影響について考察した学術論文はほとんど存在しない。

上記の現象から、復興過程におけるもたつきは、政治や経済的な要素、さらに文化や習慣的な要素などによって引き起こされることが読み取れる。それゆえに、人間の災害に対する反応は、災害それ自体に対する反応であると同時に、社会文化的に構築された反応でもあると言える。つまり、災害を社会的な出来事として解釈や分析をすることができるのである。しかしながら、今までの人文学・社会科学における災害研究では、災害発生時の社会システムの反応、つまり防災・減災や復興過程に研究の力点が置かれてきた。今までの研究で見過ごされていた観点は、人間の行動が災害の発生や被災の程度に及ぼす影響と、被災地の社会・文化的構造が復興過程に及ぼす影響である(Cohen 2008a)。つまり今までは災害を単純に「普通」の社会状態と対比して考察してきた傾向があるが、今後は社会文化的に構築された出来事であると考えられる必要もある。

そこで本稿では、2004年津波被災後のアンダマン海沿岸ビーチリゾートにおける仏教徒(主にタイ人)の幽霊に対する混乱と、それがもたらした観光復興への影響について考察する。本稿によって、今までの災害研究で見過ごされていた観点である、復興過程における被災地の社会・文化的構造がもたらす影響の重大性が理解できるであろう。

2. タイ仏教における死と精霊信仰

津波被災後のタイで広まった幽霊出没に関するパニックは、日本や欧米諸

国のメディアで報道されることはほとんど無かったものの、「第二の津波」(Cohen 2008a)と言われるほどタイ人を恐怖に陥れた。プーケット島在住のトゥクトゥク(タイで見られる三輪車タクシー)運転手レック(Lek)が被災11日後の2005年1月6日に体験したという以下の心霊現象は、被災者であるか否かに関わらず多くのタイ人に噂として広まったものの一例である(Cheng 2005)：

「カタビーチ(Kata Beach)まで。」

7人の外国人観光者は200バーツ払うことを約束し、トゥクトゥクに乗り込んだ。

しばらく運転すると、何故か体全体が感覚を失ったような気がした。ふと後ろを見てみると、乗っていたはずの7人の姿は無かった。

被災後、アンダマン海沿岸のビーチリゾートでは幽霊が出没するという噂が広がり、レックもそれを聞いていた。自分が乗せた乗客は幽霊であったと確信するまでに時間はかからなかった。

彼は被災後、首に魔除けのお守りをぶら下げていたが、それも役には立たなかった。

「怖い経験はこれ以上したくない！トゥクトゥク運転手をやめて、別の仕事を探そう。自分には、育てなくてはいけない娘がいる。だけど、夜中に運転をするのは御免だ！」

他にも、以下のような心霊体験談が報告されている：

「ピピ島(Koh Phi Phi)の漁師が、欧米人観光者の助けを求める叫び声を聞いた。しかしながら、声の主を探すことができなかった。」(Sorajjakool 2007)

「被災状況がひどかった地区にある全滅したホテルから、一晚中外国人女性の叫び声が聞こえてくる。その全滅したホテルを見張る警備員は毎晩のように幽霊を目撃し、耐えられなくなって仕事を辞めた。」(Cheng 2005)

「津波被災者の遺体を運び終わり、空のトラックを運転していた運転手が、助けを求めて泣き叫ぶ声を聞いた。」(Sorajjakool 2007)

「カオラック (Khao Lak) に居住するある家族の自宅では、電話が昼夜問わず鳴り響く。亡くなったはずの友人や親戚が泣きながら『火葬場の炎から助け出してほしい』と、しきりに受話器越しに訴えてくる。」

(Cheng 2005)

レックの心霊体験のような、プーケット島のトゥクトゥク運転手が欧米人観光者の幽霊を乗せたという話は、電子メール、メディアなどを通してタイ国内に拡散され、都市伝説になった。欧米人がこの種類の心霊体験談を聞くと、失笑したり「地元のタクシー運転手を脅すようで失礼だ」とか「金を払わずに消えた幽霊は失礼だ」などと現実的な批判をしたりするというが、多くのタイ人は本気で怖がる傾向にある (Ehrlich 2005)。タイ人が「第二の津波」と言われる程までに幽霊を恐れる理由は、タイのみならず多くの仏教国で見られる独特な精霊信仰にある。それは仏教伝来以前から存在する土着の精霊信仰的な信念に基づいており、幽霊の存在を認めることや信仰上の禁忌(タブー)に強く影響を受ける一方、仏教、儒教、道教、陰陽や他の宗教的概念に影響を及ぼしている¹⁾。さらにタイにおける精霊信仰においては、幽霊の不安で落ち着かない気持ちを落ち着かせることができるのは、故人の家族や親戚だけであるという考えがある。つまり、上記の心霊体験談のように欧米人観光者の霊はタイ人の霊以上に心霊体験談に頻繁に登場する理由は、タイ人の霊は家族や親戚によって慰霊されるものの、欧米人観光者の霊は永遠に慰霊されることは無いと信じるからである (Barton 2005)。タイ人、欧米人被災者に限らず死後に適切な宗教的儀式を踏まずに身元が確認されないまま土葬された死体が多く、それは地元住民が幽霊出没を懸念する原因ともなった (Cohen 2008a)。

そこで、次章以降でアンダマン海沿岸ビーチリゾートの復興期における幽霊をめぐる混乱とそれがもたらした観光復興への影響を考察する前に、本章

では、タイ仏教の死に対する世界観とタイ人の心霊体験に大きく影響する集合的無意識について概観する。さらに、タイ仏教の死の世界観と西洋的な死の世界観を比較する。

2-1. 死の世界観と集合的無意識

土着の精霊信仰が信じられていたタイに、スリランカ大寺系の上座仏教（小乗仏教）が伝えられたのは、12世紀末から13世紀にかけてのことである。衰え行くスコタイ王朝を仏教思想で立て直すためにタイ族の君主として初めて出家したりタイ王（即位期間：西暦1347-1368）以降、歴代のタイ国王は仏教を事実上の国教として保護してきた²⁾（小野沢1995）。それ故に、2010年時点で約6500万人を数えるタイ人の約95%は仏教徒である（外務省2013）。

上座仏教はブッダの自力救済の精神を受け継ぎ、厳しい戒律と修行によって欲望を断ち、個人の悟りを完成させた聖者（阿羅漢）になることを目指す（小寺2011）。タイ仏教は、そこにバラモンの信仰（ブラフマニズム）と仏教伝来以前から存在した精霊信仰（アミニズム）³⁾が加味された独特の仏教として発展した（林1984）。タイにおける上座仏教の核心をなすのが、自己犠牲的な行為の見返りを功得とする積徳行（タンブン、またはタム・ブン）である。仏・法・僧そして寺院を支える喜捨・寄進行、さらに出家などによって蓄積された功得（善徳・ブン）は、現世での個人の運や境遇を向上させ、死後はよりよき来世を迎えさせる⁴⁾。一方で、悪行（ハーブ）⁵⁾を重ねる者は地獄に落ち、来世での再生もままならぬ迷い霊になると信じられている（林2006）。功得は行為者自身が得るものであるが、遺族が積んだ功得を故人に送って供養するように、他者に振り向けることもできる。また現世においても、功得が両親、親族、さらにその場で居合わせた見知らぬ人との関わりさえ築くことがある。「他者」との解放的関係を生み出すタイ仏教は、集落空間や身体の世界に根ざした実践である精霊祭祀と様々な形で融合し、地域

ごとに多彩な仏教実践を生み出している（林 2006）。

上述の通り、精霊信仰はタイ仏教の根幹をなすものであり、人々は精霊（ピー）にあらかじめ配慮しておく。守護神や自然物に宿る精霊のような中立的な精霊は、人間が供養を行って慎重に取り扱えば危害を及ぼすことは無い。一方で、悪行を繰り返した人の精霊や、不慮の死（特に水難事故と出産による死）を被った人の精霊、異常な欲望を持つ精霊、さらに自然現象と関連した精霊など⁶⁾は悪霊と考えられ、向こうから攻撃的に危害を加えてくるとして恐れられている⁷⁾。悪霊の危害を撃退するには、サンガ（戒律に従って修行に励む集団、すなわち僧）が提供する護呪（プラ・パリット）⁸⁾を詠唱しながらの聖水（ナム・モン）の撒布⁹⁾や聖糸（サーイ・シン）の圍繞¹⁰⁾、さらにはプラクルアン（悪霊がもたらす災厄に対処するためのお守り）の護符など、種々の超自然的な力に頼るしかないとされる（小野沢 1995）。

このように、タイ人の多くは仏教に帰依し精霊を祀る。精霊が無事に過ごせるように一方で精霊に配慮し、他方で仏教の法力に頼み、功得の効果にあずかろうとする。仏教は、精霊に対抗する呪術手段として利用されていると言える。しかしながら、精霊を祀る人々の多くは、その存在を確信しているわけではない。「精霊は存在するか？」と尋ねると、彼らは「わからない」と答える（高井 2006）。精霊は死後の世界のものであるため、迷信深いタイ人であっても、それは存在するともしないとも答えられないのが本音である。

世俗化された現代社会において、タイ人が幽霊に対する恐怖心を抱く度合いは、過去のそれと比べて小さくなったと考えられる（Rittichainuwat 2011）。それでも、個人が抱く将来への不透明性に対するストレスや不安、恐れなどは、現代においても幽霊として表象されている。津波被災で発生した幽霊は、おそらくは国家レベルで起こった大災害を受け入れ、さらにそれに対処することができないでいる社会を映し出している（Sorajjakool 2007）。仏教の世界観では、物事は何事も不完全であるため、津波は自然の法則に従って起こったものであるから仕方が無い¹¹⁾と考えられている。つまり、幽霊は社

会の脆弱性、現状への適合、人間の死すべき運命を受け入れる必要性を象徴していたのかもしれない。

タイ人の多くが経験した心霊体験やそれに対する恐怖心は、ユング心理学に照らし合わせると、集合的無意識が表現されたものであると言える。集合的無意識とは、個人のコンプレックスよりもさらに深い無意識中に存在する、集団や民族、人類の心に普遍的に蓄積された先天的な構造領域（精神要素）を指す。人間の思考や判断、行動は、自我と外的世界との相互作用によって決まる面が大きい。極度のネガティブな外的刺激に影響を受けた時、人間が持つ集合的無意識は時として困惑、落ち込みや心配などに変貌し、悪夢、幻影（幽霊）、病理上の幻覚、妄想的な考えなどといった外部世界に投影される形で現れる。つまり、幽霊に対する恐怖という古代から伝わる集団的な無意識が、津波災害による損失や悲哀の経験を通して一気に爆発し、それが人間は儂いものでありそれを受け入れなければならないという意識的かつ仏教的な精神に取り入れられた結果、心霊に対する恐怖心がタイ人に形成されたのである（Sorajjakool 2007）。

2-2. 西洋的な死の世界観との比較

現代のタイ人が抱く幽霊に対する恐怖心の度合いは、過去のそれと比べて小さくなったと言われるが、それでも心霊を迷信として片付けることができない根強さが残っているのは事実である（Rittichainuwat 2011; 高井 2006）。幽霊に対する恐怖心やそれに対処するための精霊信仰、さらにいずれは自分自身にも訪れる死に対する恐怖心はタイ人のみならず、世界中の人々に共通して見られるものである。しかしながら、タイ人をはじめとした東洋人の恐怖心に対する程度やその様態と、大多数がキリスト教徒である欧米人のそれは大きく異なるようである。そこで、タイ人の死の世界観と欧米人のそれを比較することによって、タイ人の死に対する価値観を明らかにする。

幽霊の存在を認める人は、東洋人のほうが圧倒的に多いものの欧米人にも

存在する。ある研究によると、37%のアメリカ人が霊に取り憑かれた家の存在を信じているという (Rittichainuwat 2011)。さらに、イギリス人の 40%が幽霊の存在を認め、37%が心霊体験をしたことがあるという (Rittichainuwat 2011)。西洋の悪霊は東洋のそれと同様、不慮の死を被り現世に未練がある死者の魂が生前の姿で可視化されたもの、と考える。欧米人の幽霊を信じる人々は、異常な出来事 (異常気象、病気、息苦しさや原因不明の気持ちの落ち込みなど) が起こった原因は幽霊にあると信じる傾向がある (Wiseman, Watt, Greening, Stevens & O'Keeffe 2002)。古代ローマ時代から人々は生者を守る守護霊の力は借りようとし、反対に危害を加える悪霊を警戒したり、祈祷文によって遠ざけようとした。このように守護霊がもたらす恩恵、悪霊に対する恐れとその対処に関する本質は、タイ人のそれらと同様であると言える。

しかしながら、タイ社会では精霊信仰が現代でも人々の社会生活の重要な位置に占められ、幽霊に対する恐怖は深刻に捉えられる傾向にあるが (第2章1節参照)、西洋社会では幽霊の存在は道徳的で無く、逸脱的で危険な考え方であると捉えられる傾向にある。キリスト教の世界では、1世紀から2世紀頃に書かれた新約聖書には既に幽霊の存在が記され、人々の恐れの対象となっていた。その後、プロテスタントにおける啓蒙思想 (17世紀末から18世紀) や神話性を排除する神学の発展によって、幽霊の存在を認める傾向は弱まったとされる。近現代の社会においては世俗化がより一層進み、キリスト教の教えを守る人や、幽霊の存在を認める人はますます少なくなった。現代科学の世界に対する見解は特に確証された有効性を求める唯物論的思考に従っており、それは諸現象を説明する為に原因-結果の関連性のより良い理解を求める。幽霊の存在に関する議論のような迷信的な議論は、現実世界の理解や知識の獲得における障害要因であると見なされる。それ故に、合理的な科学を重要視する現代の西洋社会においては、迷信は文化の規準とはなり得ないのである (Stone & Sharpley 2008)。

このように、幽霊は現代西洋社会において邪悪なものとして扱われる傾向にあるが、このことは決して欧米人が死に対する不安や恐怖から逃れられていることを意味するものではない。むしろ後述の通り、近現代の欧米人は、古代や中世の欧米人と比べて死に関して熟考したり、死に直面したりした時に明白に表れる孤独感に打たれ弱くなったと考えられる (Stone & Sharpley 2008)。

近代以前の西洋社会に偏在していた宗教を基にした社会規範は、「良い死 (good death)」を人々に提供し続けた。つまり、宗教的規範は人々の死後の世界を約束してきたのである。現代の西洋社会において台頭してきた合理的な科学の重要性とそれに伴う社会生活の世俗化は、人々にとって何よりも死を向い入れるためには必要で意味があった宗教観やその儀式を軽視させる要因となった。宗教観の否定と科学的観点の肯定¹²⁾は、人間の生命に対する主観的認知の程度を高めたかもしれないが、宗教観が人々にもたらしてきた人生を誘導する価値観を形成させることはできていない。いくら死を扱う科学技術は進歩しても、死への解釈は見出せないままであり、死に対する明確な態度を確立させることに失敗しているのである (Stone & Sharpley 2008)。現代の西洋社会においては、経験や物事が持つ意味合いはコミュニティや文化内で共有されるものから、個人的なものへと変化を遂げた。それ故に、事象に対する神聖性というものが社会から失われ、個々人が各事象に対して自分自身で価値観を見出し、それを維持し、さらに自分自身で人生の意味を見つけ出さなくてはならなくなった (Giddens 1991)。死に関しては、死を迎い入れる公共のスペースが減り、死に対する神聖な領域が減少し、シンボリックな「死」と現実的な「生」の境界線が根本的に変化してしまっている。

現代西洋社会における生活の世俗化は、死の世俗化でもあることは驚くことではない。現代に生きることは、現代的文脈の中で死ぬことでもあると言える (Giddens 1991)。現代の西洋社会を生きる人々は、避けて通ることが出

来ない「死」から眼をそむけ、公共的な現実から組織的に「死」を排除しようとする傾向が見られる (Mellor & Shilling 1993)。それゆえに、現代的なイデオロギーは生存していることに大きな価値を見出そうとする。さらに、若さや美、身体といったものを強調する。これは、ポストモダン的な特徴であると言える (Stone & Sharpley 2008)。

上述の個人主義的な現代西洋社会の風潮と、「死」は存在しないものと見せかける社会システムは、皮肉なことに人々の死に対する恐怖や不安を払拭することには繋がらず、むしろ死に対する不明確性や、己の死に直面したときの精神的なサポートの不足を浮き彫りにした (Willmott 2000)。人々は死に直面することによって自分の人生や死後の世界、また日常生活を送っている社会のあり方などについて悩み、疑問を投げかけるようになったのであるが、死に関して熟考したり死に直面したりした時に明白に表れる孤独感に打たれ弱くなったと言える (Stone & Sharpley 2008)。現代西洋社会における死に関する問題は、社会にとっては問題とならないが、人々にとっては大きな問題である (Walter 1991)。

死を排除する動きが現代社会に見られ、死に直面したときの人々の困惑や不安、恐怖は甚大であるが、サブカルチャーやメディアにおいては死は娯乐的側面を帯びて存在している (Stone & Sharpley 2008)。死は、テレビのニュース番組、映画、音楽、雑誌、芸術、ブラックジョークなどに見られる。時には、ホラー映画のようにわいせつな意味合いを帯びて取り上げられることもある。死や災害に関する現場や展示場所を訪れること、またそれらを対象とした観光現象であるダークツーリズムも、娯楽を通して死を疑似体験する現象の一つである。

現代西洋社会における「死」を排除しようとする傾向には、明らかに矛盾が見られる。死への解釈や価値観の形成を個々人に押し付けたり、医療関係者や葬儀屋・死体処理業者などに死の扱いを限定させたりすることによって、人々の死後の世界が不明瞭になっているのは確かである。一方で、死は

人生の終焉であり、人生の一大イベントであることから、サブカルチャーやメディアには堂々と存在している。つまり、現代西洋社会において死について語ることは妨げられているのではなく組織的に隠されている、また、死は否定されているのではなく目に見えない所に存在しているのである。死がサブカルチャーやメディアに登場することは、現代欧米人に死について気づかせる要因ではある。しかしながら、この気づきは中立的で無害なものであり、それ故に死の本質について考えさせたり、いつの日か必ず訪れる己の死に対する恐怖や不安を抱かせたりするものではない。

現代西洋社会は個人が死に対する価値観を自分自身で見出し、それを維持し、さらに自分自身で人生の意味を見つけ出すことを要求する。組織的な死の排除の結果、人々が死に直面する機会はとても少なくなったが、今まで以上に死の傍観者となっている。直面する死が本物であろうと、作り出されたイメージや疑似体験であろうと、死に触れはしないが、死を傍観すること多々ある。一方で、現代タイ社会も世俗化されたと言われるものの、人々は死後の世界をよりよいものにする為に宗教的規範を生活の規準にする。西洋社会とは異なり、タイ社会では死後の世界や精霊信仰は現代日常生活の中に比較的根付いており、死をサブカルチャー的に扱うことは許されない。つまり、死に対する恐怖心は世界中の人々に共通して見られるものであるが、死に対する世界観はタイ人のそれと欧米人のそれとは大きく異なるのである。

3. タイ南部アンダマン海沿岸における津波被災の概要と観光産業への影響

2004年12月26日（日曜日）インドネシア西部時間午前7時58分（日本時間午前9時58分）にスマトラ島北西沖160kmのインド洋で発生したマグニチュード9.1の地震（スマトラ島沖地震）とその後発生した津波（インド洋大津波）は、インド洋沿岸諸国に甚大な被害¹³⁾をもたらした。この災害

は、津波被災国が東南アジア諸国のみならず、南アジアや東アフリカ諸国などの14か国¹⁴⁾に及んだこと、さらに被災国の一つであるタイでは多数の外国人観光者が被災したことから、過去に例が無いほど国際的な災害であったと言える(Sharpley 2005)。

被災時のタイは、主要マーケットである欧米諸国のクリスマス休暇の時期であり、さらに一年で最も過ごしやすい乾季に当たるため、観光のピークシーズンであった。プーケット島の宿泊施設の占有率は80%を超えていた(Cohen 2008a)。津波の前兆である引き波が始まった午前9時頃(日本時間午前11時頃)、多くの外国人観光者はホテルで朝食を取っていたか部屋でくつろいでいて、海面の変化に気が付かなかった。引き波に気が付いた現地のタイ人でさえ、それを大災害の前兆であると認識する者はほとんどおらず、逃げ遅れることとなった。引き波を見て積極的に逃げたのは漁村に住むジブシーだけであり、ビーチリゾートで日光浴をしていた外国人観光者の一部は、露出した海底や飛び跳ねる魚を見て面白がり写真撮影をしていたという(Cohen 2008a)。タイ政府はスマトラ島沖で大地震が発生したことを認知しても、津波が襲撃することは想定しなかった。そのため津波警報を発令したのは、午前9時13分(地震発生から1時間15分後)であった。津波警報システムの未整備と警報発令の遅れ、さらに人々の津波に関する知識の欠如が災いとなって、タイにおける死者数5,395人、負傷者数8,457人、さらに行方不明者数2,817人という大災害となった¹⁵⁾(写真1)(表1)(Nidhiprabha 2007)。400以上の集落が、全壊または半壊した(Cohen 2008a)。

この国際的な災害を伝える欧米諸国のメディアの関心が、被災自国民の大多数が滞在していたタイに集中したことから理解できる通り¹⁶⁾、死者の四割弱が欧米人を中心とした外国人観光者であったことはタイにおける被災の特徴である(Sharpley 2005; Cohen 2008a)(表1)。被災当時、アンダマン海沿岸の被災した6県には、1,130軒の宿泊施設(40,272部屋)が存在し、その内328軒の宿泊施設(約10,000部屋)が被害を受けた(ADPC 2005)。アン



高さ 30 メートルの津波が押し寄せたパンガー県カオラックは、タイ国内で最も被害がひどい場所であった。被災時当地を滞在していたタイ国王の孫(プム・ジェンセン(津波により死亡))とその家族の警備を行っていたタイ水上警察の巡視艇 813 号は、海岸線から 2 キロ先にあったゴム園に打ち上げられた。現在この巡視艇は、タイ国内での被災の惨劇を物語る象徴として保存されている。

写真 1 津波の惨劇を物語るモニュメント (パンガー県カオラック・津波メモリアルパーク)

(2012年5月2日筆者撮影)

表1 県別津波被災者数(死者・負傷者および行方不明者)(人)

県名	死 者				負傷者			行方不明		
	タイ人	外国人	不明	合計	タイ人	外国人	合計	タイ人	外国人	合計
プーケット	151	111	17	279	591	520	1,111	245	363	608
パンガー	1,389	2,114	722	4,225	4,344	1,253	5,597	1,352	303	1,655
クラビ	357	203	161	721	808	568	1,376	314	230	544
ラノーン	153	6	0	159	215	31	246	9	0	9
トラン	3	2	0	5	92	20	112	1	0	1
サトゥーン	6	0	0	6	15	0	15	0	0	0
合計	2,059	2,436	900	5,395	6,065	2,392	8,457	1,921	896	2,817

出典：Nidhiprabha (2007)



写真2 復興後のプーケット・パトンビーチ

(2012年4月30日筆者撮影)

ダマン海沿岸でビーチリゾートが集中するパンガー (Phang Nga)、クラビ (Krabi)、プーケット (Phuket) (写真2) の被災状況がひどく、一方で観光地化されていないラノーン (Ranong)、トラン (Trang)、サトゥーン (Satul) の各県の被災は前者の三県と比べれば軽いものであった (Cohen 2008a)。

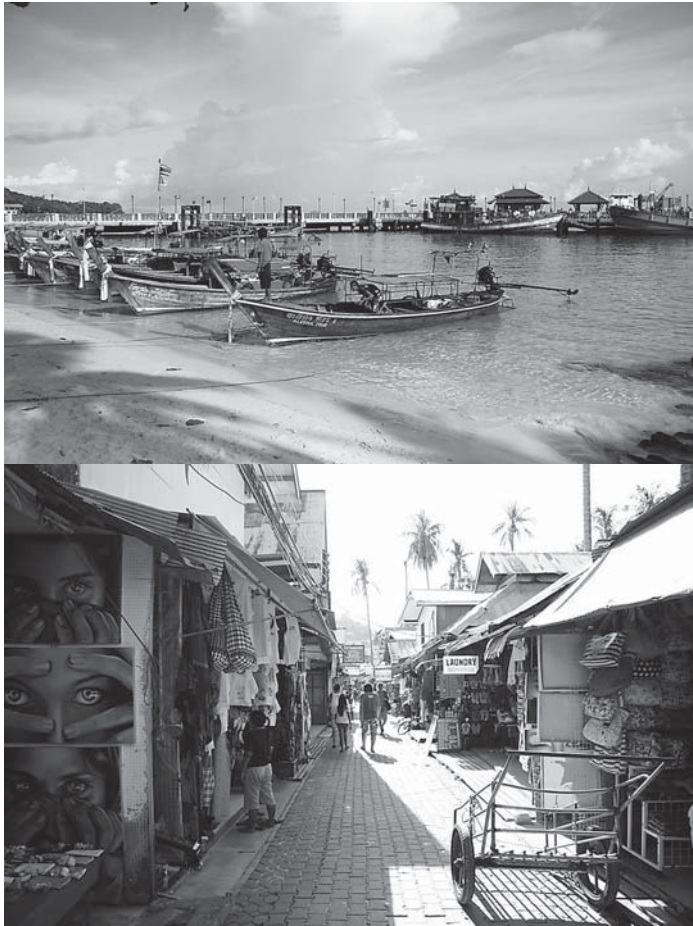


写真3 復興後のピビ島・トンサイビーチとツーリストゾーン
(2012年5月1日筆者撮影)

ビーチリゾートの中でも特にひどく被災したところは、パンガー県タクアパー郡 (Takua Pa District) のカオラック (Khao Lak) と、クラビ県ピビ島 (Koh Phi Phi) のトンサイビーチ (Ton Sai Beach) (写真3) である。タイで最も被害がひどく、ビーチリゾートの宿泊施設のほぼすべてが全壊したカオ

ラックがあるパンガー県では、県内の全死者数のほぼ半数が外国人であった(表1)。

タイにおける観光産業の経済被害額は、およそ719億7,200万バーツ(23億1,400万USドル)であった(ADPC 2005)。観光産業は最も経済的被害を被った産業であり、全経済損失の87.2%を占めた(表2)。観光施設や宿泊施設などの観光インフラの被害額(直接被害)よりも、風評被害による観光者数の大幅な減少による被害額(間接被害)のほうが圧倒的に大きかった(表2)。観光者数の大幅な減少は、プーケット国際空港の国際線利用者数にはっきりと表れている。2005年上半期(1月-6月)の利用者数(到着・出発およびトランジットを含む:326,241人)は、前年同時期のわずか34.3%のみであった。特に被災直後の2005年1月の利用者数(26,896人)は、前年同月のわずか11.1%のみであった(Borgesius 2005)。プーケット島では、全ホテルの約10%だけが被災したが、ほとんど全てのホテルが開店休業状態に陥った。被災半年後の2005年5月でもホテルの占有率は20%以下であり、その結果、プーケット島では420以上の観光産業(主にホテルとレストラン)が倒産した(Cohen 2008a)。さらに、カオラックのあるパンガー県では、6割以上の宿泊施設が被災一年以内に倒産した(Nidhiprabha 2007)。

上述の通り、被災による観光産業の損失がタイ南部・アンダマン海沿岸の被災6県(特にビーチリゾートが集中する、パンガー・クラビ・プーケットの各県)に与えた損失は甚大なものであったが、タイ全体での損失で見ると、当地の観光産業の損失はGDP成長の大きな妨げとはならなかったという見方がある。その理由は、観光産業がタイのGDPに占める割合はわずか6%だけであり、さらに被災地域の観光収入はタイ全体の30%のみを占めていたからである(Nidhiprabha 2007)。タイにおける2005年のGDP成長率は4.60%であり、2004年の6.34%と比べれば低い成長率であった。被災による損失のみならず、干ばつ、タイ深南部の政治不安、石油価格の高騰や世界貿易の衰退など、様々な要因が2005年のGDP成長率に影響を及ぼしたと

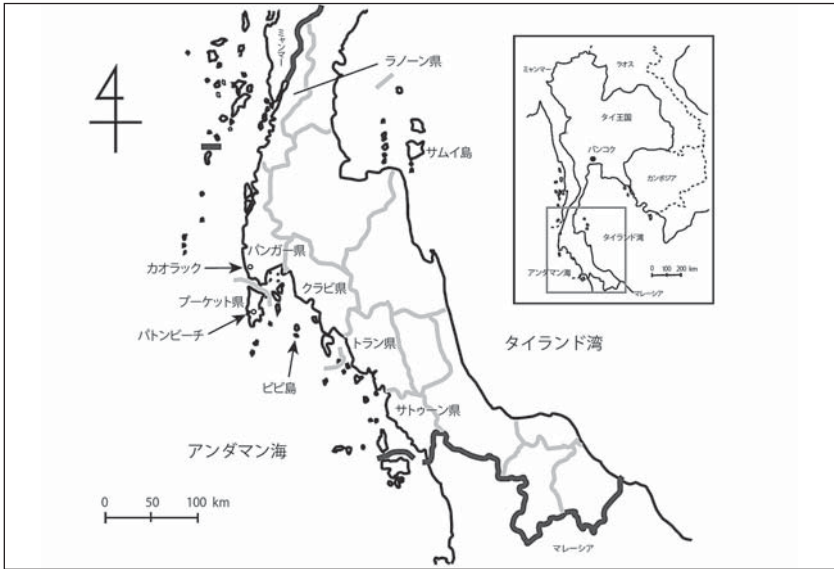


図1 タイ南部とアンダマン海沿岸被災地域

(筆者作成)

表2 経済被害額 (百万バーツ)

	直接被害	間接被害	(合計)
農 業	279	97	376
畜産業	18	—	18
漁 業	2,599	3,882	6,418
製造業	—	2,182	2,182
小売業	—	1,479	1,479
観光業	14,648	57,324	71,972
(合計)	17,554	64,964	82,508

出典：ADPC (2005)

される。被災は、2005年のGDP成長率のわずか-0.3%しか影響を与えていないと推測される(Nidhiprabha 2007)。被災は、タイ経済に深刻な影響を及ぼすと予測された。しかしながらタイ経済の失速は、悲観的な予測がもたらしたタイ国民の自信喪失によるところも大きい(Nidhiprabha 2007)。さらに、

タイ人消費者の霊に対する恐怖心から発生する、被災地域への訪問自粛や被災地域で収穫された農林水産物の購入自粛も、少なからずタイの GDP 成長率の減少に影響を与えたと考えられる。津波に流され海に沈んだ死体を魚が食べているとの憶測から、多くのタイ人がアンダマン海で漁獲された水産物の消費を拒否したため、被災地域の漁民や全国の海鮮レストランなどは深刻な風評被害に悩まされた (Ehrlich 2005)。

4. 被災混乱期における救助・救援活動と被災タイ人の幽霊をめぐる恐怖と対処

被災直後、アンダマン海沿岸のビーチリゾートに居た人々は皆パニックに陥ったことは言うまでも無い。突然の大災害に対するショックと混乱の中で、人々は自分や自分の大切な人の命を守るために必死に行動した。一方で、自分自身や自分の大切な人も命を落とす危険に直面しているにも関わらず、地元住民や観光産業従事者が他人である観光者を助ける利他的な行動も多く見られた¹⁷⁾ (Cohen 2009)。ただし、地元住民や観光産業従事者、さらには政府や行政機関などが行う利他的な行動は、欧米人観光者が最優先される場面がしばしば見られたことは注目に値する。例えば、ほぼ全滅し地元住民の死傷者が多数出た漁村よりも、そこと比べて被害が軽いビーチリゾートへのレスキューチームや機器の投入が優先された。特にタイのそれよりも優れた技能や技術を持つ先進国から派遣されたレスキューチームは、集中的にビーチリゾートで救助・救援活動を行うようにタイ政府が指示を出した。また、負傷した欧米人観光者は地元住民よりも優遇された。欧米人の負傷者は、ベッド、テレビ、インターネット機能が備わったインターナショナルスクールの救護所に運ばれ手厚い看護を受け、さらに無料の食事が提供された。さらに、タイ政府は、負傷した欧米人観光者の帰国のための費用まで負担した。一方で、全滅した漁村から運ばれた地元住民や外国人労働者は、屋外の救護

所で十分な治療を受けられず、さらに夜は寒さと蚊に苦しめられた。特に、ミャンマー人（多くは不法滞在労働者）の生命は軽視された。これは、上述のようなタイでしばしば見られる白人優先主義によるところもあるが、タイ人のミャンマー人に対する差別的なまなざしも影響している。不法滞在中のミャンマー人は、たとえ家族や大切な人が行方不明となっても不法滞在が発覚し強制送還や逮捕されることを恐れて、死体安置所で死亡を確認することは無かった。さらに、不法滞在者を雇っていたタイ人のホテル経営者も、従業員の死者数が増えることによる将来のビジネスへの悪影響や、不法滞在者を雇用していたことが発覚することなどを恐れて、死体安置所へ出向くことは無かった。ミャンマー人不法滞在労働者の死体の多くは、ホテルの制服を着た状態で発見され、勤務先を確認できたという（Cohen 2008a）。

上述のように被災直後の時期には、一部呆然としてしまう者もいるが、大多数の人々は目的意識を持って自他の安全と生存のために必要な活動を始めるとされる。被災直後の被災者の心理状態は、「検証期」や「反動期」と呼ばれる。つまり、自分自身に起こったことを検証・整理して、死に直面したが生き残れたことを認識し、負傷したことに気が付き、他者の死傷にショックを受け、行方のわからない家族や大切な人の身を案じる時期である。生き残れたことに感謝している一方、心身のエネルギーは生きること、生存と安全を確保すること、家族や大切な人との再会や保護に向けられ、覚醒状態が続くのである（ビヴァリー 1989）。

被災から10日程経つと、「心的負傷後の反応」が起こるとされる。この現象は、体験した出来事の心的追体験と関連して、自分では記憶から消し去りたいと思っても、生々しいまでの情景が心の中に瞬間的に侵入し、インパクトを与えるものである。反応は、震え、動悸、強度の不安感やパニック感、さらに悪夢の形で現れる。このような反応は初めの内は強烈に表れることがあるが、数週間後には徐々に頻度も作用も減少する（ビヴァリー 1989）。

被災から10日程経った2005年1月初旬から、幽霊の目撃談や心霊体験談

が被災民、非被災民間わず一部のタイ人によって語られ始めた。幽霊をめぐる混乱は、災害による損失や悲哀を経験したタイ人の心的負傷後の反応の一種である。第2章1節で述べたとおり、タイ人が共通して持つ幽霊や心霊に対する恐怖という古代から伝わる集団的な無意識が一気に爆発した結果であると捉えることができる (Sorajjakool 2007)。

多くのタイ人にとって、タイ仏教の戒律を守ることは、心理的な福祉の充実のみならず、悲しみのコントロール、さらには心霊や死生に対する恐怖感の払拭や価値観の形成にも影響を及ぼす (Sorajjakool 2007)。以下の様な故人を供養したり、悪霊の危害を撃退したりするための儀式が行われた：

- ・2005年1月5日、プーケットにおいてタイ南部14県から1500人の僧侶を招待して慰霊祭が行われた。一万個のランタンが飛ばされた (Cohen 2008a)。
- ・2005年1月5日、仏教、キリスト教とイスラム教の宗教指導者がプーケットスポーツスタジアムで宗教の枠を超えた合同慰霊祭を行い、1000人以上の参加者を集めた (Ehrlich 2005)。
- ・2005年1月18日と24日、身元が判明しなかった死体を対象に慰霊祭が行われた。しかしながら、地元住民の幽霊に対する恐怖心は払拭されなかったとされる (Cohen 2008a)。
- ・2005年1月19日、99人のタイ人僧侶がプーケット・パトンビーチで、死者を弔うためにお経を唱えた。タイでは9は縁起の良い数字で、99はさらに縁起が良いと考えられている (Ehrlich 2005)。
- ・2005年1月下旬、被災地域に住む仏教徒は一週間程度精進料理のみを食し、白色の服を着ることによって清純と非暴力を唱えた (Ehrlich 2005)。
- ・プーケット県ラワイ (Rawai) の漁師達は、被災前から伝統的に毎年8月の日の入りの時刻にココナッツミルク、バナナ、魚や白米をアンダマン海に投げ入れ、漁師や海水浴客を破滅に導こうとする海の悪霊

を鎮める儀式を行ってきた。彼らは自分自身が行ってきたこの伝統的儀式が不十分で、悪霊を鎮めきれなかったからアンダマン海が津波に襲われたのだと解釈し、被災後は儀式を行う頻度を多くした (Ehrlich 2005)。

これらの宗教儀式は、悲しみに対処するための基本的療法であると考えられる。慰霊祭の多くは僧侶によるお経と、民衆が僧侶にサフラン色のローブを渡すという行いから成り立つ。サフラン色のローブを僧侶に渡すことは、善行を愛する故人に渡してもらおうということの意味する。この儀式の間、民衆は故人に対して心配していることを祈り続ける¹⁸⁾。善行を故人の霊に手向ける儀式 (pae meta jit) は、僧侶が居なくても個人的に行い続ける。霊が極楽に行けたと確信できるまで、限りなく行い続けるのである (Cohen 2008a)。被災者の多くはタイ仏教の世界観の観念に従って被災の現実を受け入れたり、被災後の新たな環境の変化を受け入れたりする努力をしたと言えよう。被災後、自治体や地域コミュニティーが主導して数多くの宗教儀式が行われた。それらはタイ人被災者の精神的苦痛を和らげる役割を果たし、精神疾患や自殺防止にある程度役立ったと精神病理学者は評価している (Ehrlich 2005)。しかしながら、このような宗教儀式だけでは対処できない程に精神状態が悪化し、生きるための士気を失ったり、悪霊の存在に悩まされたりする被災者も多くいた。これらの点を悪用して商売をする不謹慎な占い師も多く登場し、僧侶が注意を呼びかけることもあった (Ehrlich 2005)。

5. 被災タイ人やアジア人観光者の幽霊をめぐる恐怖とタイ政府の対応

被災後間もなく、当時のタイ王国総理大臣であったタクシン・チナワット (Thaksin Shinawatra) は、被災者の救助と生活の保護に次いで、三番目の重要な復興計画方針として観光産業の復興を挙げた。観光産業は、地元経済の保護と失業率の増加を食い止めるために必要であった。さらに、今までの経



写真4 ビーチリゾートに建設された
津波避難タワー（ピビ島）
(2012年5月1日筆者撮影)

済成長に悪影響を与えることを少しでも食い止めるためにも、観光産業の早期復興は必要不可欠であった（Cohen 2008a）。政府は観光復興の重点項目として、インフラの復興、ビーチリゾートにおける津波警告システムや避難場所の確立（写真4）と、タイ観光の国際的な評判の回復の三点を挙げた。

ビーチリゾートの復興に関して、タイ政府は今までの乱開発された結果である無秩序な景観や非持続可能な観光開発を反省し、見た目が良く、持続可能性のある観光地への再生を主張した。しかしながら、その裏腹には小規模零細観光業者を排除し、タイの経済成

長に貢献するとされる大規模な観光業者の誘致を行う企みがあった。つまり、政府や大規模企業（特に多国籍企業のホテル）の利益を守ることが意図されていたのである。政府にとって、津波で破壊されたビーチリゾートは地域の観光を再編する絶好の機会であったものの、このような企みは地元の小規模零細観光業者や地元住民らの反対によって、実現しなかった（Cohen 2008a）。

国際的な評判の回復は、観光者の回復状況とそれがもたらす経済効果に明確に反映されることから観光復興の最重要項目として掲げられ、タイ政府やタイ政府観光局（TAT/ Tourism Authority of Thailand）はそれに神経をとがらせた。遺体確認作業には経験不足や死体の腐敗が早く相当手間取ったもの

の、国際的な評判の回復の重要性やタイ人の欧米人優先主義（第4章参照）が相まって、欧米人観光者の保護、救助、送還や遺体確認作業は、タイ人やアジア人被災者らに対するそれらよりも優先された（Cohen 2008a）。世界的に有名なビーチリゾートがピークシーズンに被災し、死傷者の国籍が多様であったが故に、タイの被災状況は世界各国で詳細に報道された。それが災いして、実際はそうではないにも関わらず、アンダマン海沿岸のビーチリゾート全てが全滅したと世界中の人々に認識され、観光者数の回復には観光インフラの復興以上に時間と労力を要した¹⁹⁾（Rittichainuwat 2011）。特にアジア各国（中国、台湾、香港、シンガポール）の観光者はタイ人同様に被災地での幽霊の出没を強く恐れる傾向があり、回復には欧米人観光者以上に時間を要した（Henderson 2005; Lovgren 2006）（表3）。幽霊の存在を頑なに信じている一部のアジア人にとっては、全ての死体が発見され、適切な宗教儀式が執り行われ、さらに埋葬されない限り、被災復興後も幽霊に対する恐怖心や不安から逃れることができない者もいる。このような人々の行動が影響して、タイランド湾にあるサムイ島は、アンダマン海沿岸ビーチリゾートの被災後に観光者数を大きく伸ばした（Shea 2005）。このように観光者数の回復が困難を極める中、タイ政府やTATが行った観光復興や幽霊に対する恐怖心の払拭に関わるキャンペーンは以下のようなものであった：

- ・観光産業が再建中で津波警告システムも確立されていない中、総理大臣自らがTATに対してブーケットを安全な場所として売り込むように指示した（2005年）。当時、安全面は幽霊と共に多くの観光者を怖がらせる要因であった。再度津波が発生した時に対処できるインフラが備わっていない状態での安全宣言であり、総理大臣やTATに批判が集まった（Cohen 2008a）。
- ・タイ国内においては被災地域での幽霊の話は度々メディアの対象となり、タイ政府はそれを話題としないように要請した。その効果も手伝って次第に幽霊の話は取り上げられなくなったものの、タイ人は被

表3 主要国別観光者数の推移(2003-2007年)

	2003	2004	2005	2006	2007
マレーシア	1,340	1,391	1,343	1,579	1,552
	(一)	(+3.82)	(-3.48)	(+17.67)	(+1.69)
	13.29	11.85	11.61	11.42	10.73
シンガポール	634	738	798	818	799
	(一)	(+16.39)	(+8.15)	(+2.87)	(-2.33)
	6.20	6.28	6.90	5.92	5.52
インド	231	301	353	430	506
	(一)	(+30.26)	(+17.41)	(+21.82)	(+17.80)
	2.29	2.56	3.05	3.11	3.50
日本	1,026	1,194	1,189	1,293	1,249
	(一)	(+16.39)	(-0.47)	(+9.43)	(-3.45)
	10.18	10.18	10.28	9.36	8.63
韓国	695	911	817	1,102	1,076
	(一)	(+31.06)	(-10.36)	(+35.01)	(-2.36)
	6.89	7.76	7.06	7.97	7.44
中国	625	780	762	1,033	1,003
	(一)	(+24.82)	(-2.26)	(+35.62)	(-2.92)
	6.20	6.65	6.59	7.48	6.94
台湾	526	560	378	473	427
	(一)	(+6.52)	(-32.52)	(+25.99)	(-9.69)
	5.22	4.77	3.27	3.42	2.95
香港	657	665	442	463	448
	(一)	(+1.15)	(-33.61)	(+5.66)	(-3.30)
	6.52	5.67	3.82	3.35	3.10
イギリス	550	635	685	746	746
	(一)	(+15.39)	(+7.93)	(+9.48)	(+0.12)
	5.46	5.41	5.92	5.39	5.16
フランス	221	253	262	320	352
	(一)	(+14.41)	(+3.65)	(+22.71)	(+9.92)
	2.19	2.15	2.26	2.31	2.43
ドイツ	389	450	445	508	537
	(一)	(+15.53)	(-1.02)	(+16.35)	(+5.76)
	3.86	3.83	3.85	3.67	3.71
オーストラリア	285	397	424	539	638
	(一)	(+39.41)	(+6.77)	(+27.73)	(+18.50)
	2.82	3.38	3.66	3.90	4.41
アメリカ合衆国	469	567	591	641	624
	(一)	(+20.79)	(+4.30)	(+9.43)	(-2.66)
	4.65	4.83	5.11	4.64	4.31
国際観光者 全合計	10,082	11,737	11,567	13,821	14,464
	(一)	(+16.42)	(-1.45)	(+20.01)	(+4.65)
	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

上段：観光者数(千人)，中段：観光者数前年比(%)，下段：マーケットシェア(%)

出典：Tourism Authority of Thailand (2013)

災地域を訪れることを避け続けた (Cohen 2008a)。

- ・幽霊を恐れる傾向にあるアジア各国の人々に対しては、幽霊を恐れることは止めてタイの被災地へ旅行をするように、総理大臣自らが繰り返しメディアを通して呼びかけた。さらにタイ政府はアジア人観光者向けに数百万ドルを投資して、幽霊に対する恐怖心を払拭させ観光者を取り戻すための大掛かりな観光キャンペーンを行った (Lovgren 2006)。総理大臣の呼びかけは、アジア人の恐怖心払拭どころか逆に幽霊の存在をアジア人に思い知らすこととなった。つまり、全くの逆効果を生み出したと考えられ、大いに批判されるべき点である²⁰⁾。
- ・被災一年後の2005年12月26日には、政府主催の大規模な記念式典がタイで有名な歌手や映画スターを招待して行われた。被災住民は、それは金の無駄遣いで政府の見世物であり仏教の教えに従った死者を弔う式典とは程遠いと批判し、参加することを拒否した (Pravda.ru 2005)。

首相主導でタイ政府やTATが行ったキャンペーンは、今までのタイの経済成長に対する悪影響を少しでも食い止めることを目的とした観光者数回復、つまり被災観光地の評判の回復を急ぐことに力が注がれた。一方で、タイ仏教の教えやそれと密接に関連した精霊信仰に対する配慮は無かった。このことは、精霊信仰に対して非常に敏感なタイ人にとっては無神経であると受け止められ、批判の対象となった (Cohen 2008a; Rittichainuwat 2011)。

6. 被災復興の進展に伴う被災タイ人の幽霊をめぐる恐怖の変化

アンダマン海沿岸のビーチリゾートは被災前、外国人観光者に向けて発信させた「パラダイス」のイメージとは裏腹に、地元住民を始めとした多くのタイ人の間では非持続可能な観光開発が批判され、「失われたパラダイス」(Paradise Lost)と揶揄されてきた。それは被災によって「破壊されたパラダ

イス」(Paradise Destroyed) に変わってしまい、被災後しばらくの間は「全壊」「死」「幽霊」などといったイメージに被災地は悩まされた(Cohen 2008b)。一方で被災数週間後には、「失われたパラダイス」と揶揄されてきたビーチリゾートは、被災復興を経て「生まれ変わった新しいパラダイス」(Paradise Reborn) に再起されるであろうと、一部のタイムメディアが言い始めた。つまり、政府が発表した復興計画をきっかけとした持続可能な観光開発への転換(第5章)と同様に、津波によって乱開発された観光地は流され、環境に配慮した新しい観光地が建設されるであろう、ということである。津波にはクリーニングの効果がありビーチは20年前の姿に戻ることができるであろう、と言ったり、被災からは免れたものの観光者が居ないビーチを本来のビーチのあるべき姿であると語り、「パラダイス」の状態である、と言ったりするメディアまで現れた(Cohen 2008a)。このパラダイス再生に関するメディアの発言は、被災ビーチリゾートが復興するにつれて幽霊もその場から徐々に消え去る、ということを示していた。しかしながら、神聖なる仏教儀式が繰り返し執り行われても、タイ人被災者の多くは幽霊に対する恐怖から払拭されることができなかつたのに、到底被災者の根深い恐怖心を変化させることができるものではなかつた。遺体は完全に除去され復興が進んでいた2005年12月(被災1年後)でも、その程度こそは低くなったもの²¹⁾、タイ人の中で広まる幽霊出没に対する恐怖心は収まってはいなかつた(Shea 2005)。

しかしながら、長期的に見れば復興と比例してタイ人の幽霊に対する恐怖心の程度が低くなっていったのは事実である。2006年6月に行われたNidhiprabha(2007)の調査によると、多くの被災者は傷心しているものの被災の現状を受け入れていた。Rittichainuwat(2011)の調査によると、2010年に被災地に幽霊が存在し、観光者の行動を阻害すると考えているタイ人は2005年と比べて圧倒的に少なくなった²²⁾。ただし多くのタイ人は、観光者が被災地に戻ってくるにつれて幽霊は減少し、恐れるほどでは無くなった

が、幽霊は未だに存在しうろたえていると信じている。

タイ人にとって、幽霊をめぐる恐怖は「第二の津波」として恐れられたわけであるが、ジプシーにとっては被災後に土地を略奪して新たなリゾート開発を企む観光業者との対立も「第二の津波」として恐れられた。ジプシーは何世代にもわたってアンダマン海沿岸の漁村に住み着いていたものの、土地所有の権利が確立されていなかった。1980年代以降の急激な観光開発が進んだ時期でも何とかジプシーは自分の土地を保持することができたが、被災後は状況が一変し、彼らの土地を奪おうとするものが現れた。その後一部の対立に関しては裁判が行われ、土地を略奪しようとした業者が敗訴した。しかしながら、土地を奪還したジプシーは政府の援助を十分に受けられず、電気・水道の無い劣悪な場所に住むことになったのである（Cohen 2008a）。実際のところ、ジプシー以外にも多くの被災者はコミュニティー内外の対立が被災前よりもひどくなったと感じていたが、土地をめぐる対立や支援の不平等な分配などに悩まされていた被災者ほど、精神的なストレスを強く感じる傾向があった（Nidhiprabha 2007）。つまり、そのような人ほど幽霊に対する恐怖心から脱却できないでいたと想像される。

7. おわりに

本稿では、2004年津波被災後のアンダマン海沿岸ビーチリゾートにおける仏教徒（主にタイ人）の幽霊に対する混乱と、それがもたらした観光復興への影響について考察した。

「第二の津波」と言われる程であった幽霊をめぐる混乱は、津波災害という大災害による損失や悲哀を経験したタイ人の心的負傷後の反応の一種であり、タイ人が共通して持つ幽霊や心霊に対する恐怖という古代から伝わる集団的な無意識が一気に爆発した結果であると捉えることができた。心霊体験は仏教徒被災者の心的負傷の反応としてしばしば見られるものであるが、

タイ人がタイ人死亡者の霊以上に欧米人観光者の霊をひどく恐れ、それが幽霊をめぐる混乱を助長した点は、世界的に有名なビーチリゾートに特徴的な場景であろう。この混乱の背景には、幽霊の存在を認めることや信仰上の禁忌に強く影響を受ける一方、仏教の概念に影響を及ぼしている精霊信仰的な信念があった。このことは、文化的信念や規範は、災害危機管理と災害復興過程において考慮されるべき重要な要素であることを示している。

しかしながら、タイ政府の観光復興の戦略を見てみると、決してタイ人が持つ文化的信念や規範を考慮したものであったとは言えなかった。タイ政府の強力なリーダーシップによって被災一年半後にはアンダマン海沿岸ビーチリゾートは物理的、また経済的にはほぼ復興したものの、観光復興戦略を見ると、経済と国際的評判の回復のみに焦点があてられたものであった。当然ながら、被害を受けたインフラや観光施設が復興したり、国際的評判が回復したりすること無しには観光者も被災地に戻ってくることは無い。政府の手腕が比較的早期な観光復興に繋がったと考えられ、この点は評価されるものである。それとは裏腹に、被災者の心情や幽霊に対する恐怖心の深刻さを無視した復興は批判される点である。さらに、被災地での幽霊出没を恐れて訪問を控えるアジア人に対する観光キャンペーンにも問題があった。

このように、被災に対する反応は、タイの社会文化的背景や組織的なシステムに影響を受けている。むしろ、幽霊をめぐる混乱や、被災後に土地を略奪して新たなリゾート開発を企む観光業者とジプシーの対立など、被災前にあった対立や社会文化的な特徴をより浮き彫りにさせたとも言える。タイ人にとって幽霊をめぐる恐怖は根深く、決して迷信では済まされない。それ故に、観光復興は地域経済の復興の手段と考えるのは当然であったが、一方で被災地域の経済的特徴のみならず、文化や風習、宗教的側面までを考慮した上での復興を行うべきであったのである。

注

- 1) 精霊信仰や占星術、祓いや呪術などの民間信仰は、教義や組織などではなく、現代のアジア社会においても日常生活と深く結びついていたり、しきたりとしてコミュニティ内で広められていたりする。例えば、中華圏における商品の価格の最終桁は縁起が良いとされる数字「8」で終わるものが圧倒的である一方、縁起の悪い数字「4」は避けられる。中華圏の観光者の一部は、風水を用いて吉方位を割り出し、その方向を旅することによって旅行先の良い運気を手に入れることを行う (Huang, Chuang, & Lin 2008)。さらに、「鬼月」(旧暦の7月)に台湾人は、水遊び(ビーチ、水泳、ボート、魚釣り、川沿いでのバーベキューなど)をすることを控えたり、様々なリスクを伴う行動や婚礼・旅行などの非日常的活動を控えたりする。多くの人が水遊びを控える為、この間は水難事故件数が減少する (Rittichainuwat 2011)。事故や事件などの異常な原因によって亡くなった人、特に溺死した人は悪霊と変わり怒り狂い、死亡現場付近の人々に仇を討つと信じられている。このように迷信的な信念は、商品への満足度やリスクの下での意思決定などに強い影響を及ぼしている。死は特に不幸なこととして位置づけられ、幽霊に関する冗談を言うことは、全ての精霊信仰において禁忌項目として認知されている (Huang, Chuang, & Lin 2008)。
- 2) タイ憲法では、国民に宗教選択の自由を認めている。それ故にタイ王国には国教が存在しないことになるが、以下のような理由から「事実上」仏教が国教であるということが出来る：
 - ・国民の圧倒的多数が仏教徒であること。
 - ・タイ国王は仏教の最高擁護者であり、仏教徒でなければ王位に就くことができないこと。
- 3) アニミズムとは、あらゆる事象や現象には人知を超えた様々な意思が働いている可能性を認める世界の見方である。私たちは環境を物的な資源や条件とみる人間中心主義的な見方に馴染んでいるが、アニミズムの世界観はこうした見方を相対化し、人間の能力の限界性を強調する人間観であると言える (高井 2006)。
- 4) 人が死すると人間の身体の要所に宿るクワン(非人格的で流動的な生命力、生魂)は雲散霧消し、人格的靈魂(ウィンヤーン)は肉体を離れ輪廻転生の旅に立つと信じられている (高井 2006)。
- 5) 以下に示した悪行を繰り返すものが、死後の世界で幽霊に変貌させられると考えられている (Sorajjakool 2007)：
 - ・生き物を殺すこと
 - ・盗みを働くこと
 - ・性的な秩序を守らないこと
 - ・不謹慎な言動(嘘・悪口・軽蔑・嫉妬など)をすること
 - ・問題となるような飲酒行動や薬物摂取を行うこと

- 6) 病気、寄生虫、精神障害、動物、自然現象などに関連した人間の不安や恐れへの念が悪霊として形象化されている。例えばビー・カスターは醜い老婆の姿をした異常な欲望を持った悪霊で、人間の肉、特に頭と内臓を好んで食べるという。深夜に人間の排泄物を求めてあたりを徘徊すると考えられている。さらに、夜中、水のあるところに鬼火として現れる悪霊は、自然現象と関連した悪霊として恐れられ、旅人の行く手を迷わせるといわれる(小野沢 1995)。
- 7) 生前に悪行を繰り返した者や、不慮の死を被った者などは、人格的靈魂(ウインヤーン)が輪廻転生の旅に出ることができずに悪霊として地上にとどまり、現世を生きる人々のクワンにいたずらをすると考えられている(高井 2006)。
- 8) 呪術志向の仏教の中心に位置するものであり、ヒンドゥー的民間儀礼の呪文も組み込んだパリー語の経典である(小野沢 1995)。
- 9) 僧がブラ・パリットを唱えながらふりかけるナム・モンに人々があたれば、体内に力が満ち、災厄を免れることができると信じられている(小野沢 1995)。
- 10) 災害現場や葬儀場などにサーイ・シンを張りめぐらし、その一部を僧が手に持ちながらブラ・パリットを唱え、あたかも電気が電線に伝わるように呪力が満ちて、悪霊の進入を防ぐことができると信じられている(小野沢 1995)。
- 11) キリスト教のように、なぜ神様が津波災害を起こしたのか、という考えは無い。
- 12) 例えば現代の医療技術が発展した社会では、死は死すべき運命によるものという過去の考えは消滅し、医学的理由(癌や心臓病など)によって死ぬもの、という考えが一般的になった。
- 13) 被災者約 206 万人、死者・行方不明者約 23 万人、被災総額約 68 億ドルであった(内閣府 2006)。
- 14) 東南・南アジア諸国では、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、モルディブなどが、震源地から 5,000km 以上離れた東アフリカ諸国ではソマリア、ケニア、タンザニアなどが被災した。
- 15) 死者・行方不明者数には、タイ社会において差別を受けているミャンマー人不法滞在労働者やタイ人性産業従事者などは含まれていない(Cohen 2008a)。ミャンマー人労働者(その多くは不法滞在労働者)の死亡者数は、推定 2,500 名である(Cohen 2009)。
- 16) 最も甚大な被害を被った地域は、地震と津波両方の影響を受けた震源地近くのアチェ州を中心としたインドネシア・スマトラ島であった。しかしながら、欧米諸国のメディアの関心は、被災自国民の大多数が滞在していたプーケット島を中心としたタイ南部・アンダマン海沿岸の津波被災であった。そこの被害も酷かったが、スマトラ島ほどではなく、被災の程度とメディアが伝える情報量が一致しないことに対する批判も起こった。
- 17) 観光地の社会の秩序構造に組み込まれていない観光者はお客様の立場であり、本質的には地元住民にとっては他人である。このような観光者が災害に見舞われた時、親族

や被災地社会からの援助を十分に受けられない状態にあることから、孤立して不安定な状況に直面することが十分に考えられる。つまり、地元民の良心が観光者の援助の程度を決定付けると考えることができる。観光者が依存していたホスピタリティサービスが崩壊してしまった被災直後においても、タイでの被災後の観光者の状況を見ると、利他的な行動を積極的に行う地元住民、観光産業従事者や政府・行政関係者などの地元関係者の援助を受けていることが伺える (Cohen 2008a)。

- 18) 例えば、体が悪かった故人なら健康について祈る、故人に対して生存中に色々と迷惑をかけたと思うのなら謝る、などといったことが行われた。
- 19) 観光産業が災害から復興する際の障害となるものは、直接被害 (例えば建築物の損失とその復興) よりも間接被害 (人々 (特に観光者) の被災に対する認知がもたらす風評被害) の方が大きな障害であることは、SARS、口蹄疫、テロリズム、さらに津波などの人的・自然災害などで証明されている (Rittichainuwat & Chakaraborty 2009)。実際には被災していない隣接地域までもが被災しているかのように観光地訪問予定者は思うため、観光者数の減少は実際の被災地以上に広がることもわかっている (Rittichainuwat 2011)。被災地から 500km 以上離れたバンコクでは、アンダマン海沿岸の津波被災直後の 2005 年 1 月の観光者数が前年同月と比べて 27% 減少した。アジア人観光者の減少が大きく、タイ全土において幽霊が出没するという恐れが大きく影響した (Lovgren 2006)。
- 20) 欧米人観光者は物質的な回復 (被災復興) を考慮して被災後の観光地を訪れる意思決定を行うが、アジア人観光者は身体的・心理的安全や被災の深刻さに焦点を当てる。つまりアジア人観光者にとっては、被災地での幽霊の出没状況が旅行の意思決定に極めて大切なのである。言い換えるなら、欧米人は将来 (復興) に眼を向けているが、アジア人は過去 (惨劇) に眼が向いている (Reisinger & Turner 2003)。それゆえにアジア人観光者は、被災観光地の復興をプロモーションする時に過去に起こった惨劇について触れると、敏感に反応する恐れがある。被災地に吉兆をもたらすために積極的に宗教儀式が行われていることや、欧米人観光者が被災観光地に戻ってきていることなどをアジア人に対して積極的に報道するべきである。特に中国人に対しては、「悪霊を鎮める」よりも「吉兆を広める」とポジティブな言葉で報道したほうが効果的である。「霊」という言葉を出すことによって、再びパニックが広がる可能性は大いにあり得ることである (Rittichainuwat 2011)。
- 21) 被災したタイ人の幽霊に対する恐怖心が、被災から一年経ちどの程度取まったかに関する具体的な情報は無い。しかしながら、van Griensven et. al (2006) の研究は、幽霊を極度に恐れる人々に多く見られる心的外傷後ストレス障害 (PTSD) と診断される被災者は、2005 年 2 月と比べて 2005 年 9 月では大きく減ったことを示した。2005 年 9 月時点でも障害が残る被災者の多くは、年齢や性別に関わり無く、被災によって急激な生計の変化があったり、家族や大切な人を失ったりしていた。

- 22) 2011年の調査によると、78%のタイ人が被災地へ旅行することに大きな抵抗は無いと答えた (QUO Intelligence 2011)。

引用文献

- 小野沢正喜 (1995) 「宗教と世界観」綾部恒雄・石井米雄編著『もっと知りたいタイ 第2版』弘文堂、103-147.
- 外務省 (2013) 「タイ王国：一般情報」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/data.html#01> (2013年6月3日閲覧)
- 小寺聡 (2011) 『もういちど読む 山川倫理』山川出版社.
- 高井康弘 (2006) 「精霊の世界と社会変化－「迷信」では説明できない根強さ－」綾部恒雄・林行夫編著『タイを知るための60章』明石出版、177-180.
- 内閣府 (2006) 「インドネシア・スマトラ島沖大規模地震及びインド洋津波」http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h18/BOUSAI_2006/html/honmon/hm01040103.htm (2013年6月3日閲覧)
- 林行夫 (1984) 「モータムと『呪術的仏教』－東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に－」『アジア経済』25 (10): 77-98.
- (2006) 「上座仏教の実践－揺れるサンガ組織と在家者の現在－」綾部恒雄・林行夫編著『タイを知るための60章』明石出版、172-176.
- A・ラファエル (1989) 『災害の襲うとき－カタストロフィの精神医学－』石丸正訳、みすず書房 (Beverly, R. (1986) *When Disaster Strikes -How Individuals and Communities Cope with Catastrophe-*, Basic Books Inc.)
- ADPC (Asian Disaster Preparedness Center). (2005) *The Economic Impact of the 26 December 2004 Earthquake & Indian Ocean Tsunami in Thailand*.
http://www.adpc.net/maininforesource/dms/thailand_assessmentreport.pdf (2013年4月11日閲覧)
- Barton, J. (2005) *Tsunami Sparks Ghost Sightings*.
<http://www.religionnewsblog.com/9940/tsunami-sparks-ghost-sightings> (2013年3月15日閲覧)
- Borgesius, R. (2005) *Thailand Tourism Review: Diethelm Travel's 2005*.
<http://www.bangkokpost.com/tourismreview2005/07.html> (2013年5月26日閲覧)
- Cheng, T. (2005) *Ghost Stalk Thai Tsunami Survivors*.
<http://news.bbc.co.uk/2/hi/asia-pacific/4202457.stm> (2013年3月15日閲覧)
- Cohen, E. (2008a) *Explorations in Thai Tourism*, Elsevier Science.
- (2008b) “The Tsunami Waves and the Paradisiac Cycle: The Changing Image of the Andaman Coastal Region of Thailand”, *Tourism Analysis* 13: pp.221-232.
- (2009) “Death in paradise: tourist fatalities in the tsunami disaster in Thailand”,

- Current Issues in Tourism* 12 (2): pp.183-199.
- Ehrlich, R. (2005) *Ghost Stories Haunting Thailand's Tsunami Zones*.
<http://www.scoop.co.nz/stories/HL0501/S00168.htm> (2013年2月18日閲覧)
- Giddens, A. (1991) *Modernity and self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.
- Henderson, J.C. (2005) "Responding to Natural Disaster: Managing a Hotel in the Aftermath of the Indian Ocean Tsunami", *Tourism and Hospitality Research* 6 (1): pp.88-96.
- Huang, J. Chuang, S. & Lin Y. (2008) "Folk Religion and Tourist Intention Avoiding Tsunami-Affected Destinations", *Annals of Tourism Research* 35 (4): pp.1074-1078.
- Lovgren, S. (2006) *"Hungry Ghosts" Keep Tourists from Tsunami-Hit Resorts*.
http://news.nationalgeographic.com/news/2006/01/0106_060106_tsunami_ghosts.html
(2013年2月19日閲覧)
- Mellor, P. & Shilling, C. (1993) "Modernity, Self-Identity and the Sequestration of Death", *Sociology* 27 (3): pp.411-431.
- Nidhiprabha, B. (2007) *Adjustment and Recovery in Thailand: Two Years after the Tsunami*.
<http://www.adbi.org/files/dp72.thailand.tsunami.adjustment.recovery.pdf> (2013年3月27日閲覧)
- Pravda.ru (2005) *Tsunami-hit Villagers in Thailand Criticize Anniversary Ceremonies*.
<http://english.pravda.ru/news/world/26-12-2005/73417-0/> (2013年3月19日閲覧)
- QUO Intelligence. (2011) *Khao Lak, Thailand: Seven Years after the Indian Ocean Tsunami*.
<http://quo-global.com/uploads/wysiwyg/documents/research/QUO-Research-KhaoLak.pdf> (2013年4月2日閲覧)
- Reisinger, Y. & Turner, L. (2003) *Cross-Cultural Behaviour in Tourism: Concepts and Analysis*, Butterworth Heinemann.
- Rittichainuwat, B. N. & Chakarboroty, G. (2009) "Perceived Travel Risks Regarding Terrorism and Disease: The case of Thailand", *Tourism Management* 30: pp.410-418.
- Rittichainuwat, R. (2011) "Ghosts -A travel barrier to tourism recovery", *Annals of Tourism Research* 38 (2): pp.437-459.
- Sharpley, R. (2005) "The Tsunami and Tourism: A Comment", *Current Issues in Tourism* 8 (4): pp.344-349.
- Shea, G. (2005) *Fear of Tsunami's Ghosts Still Haunt Thailand*.
<http://mg.co.za/article/2005-12-23-fears-of-tsunamis-ghosts-still-haunt-thailand> (2013年2月19日閲覧)
- Sorajakool, S. (2007) "Tsunami and Ghost Stories in Thailand: Exploring the Psychology of

- Ghosts and Religious Rituals within the Context of Thai Buddhism”, *The Journal of Pastoral Care & Counseling* 61 (4): pp.343-349.
- Stone, P. & Sharpley, R. (2008) “Consuming Dark Tourism: A Thanatological Perspective”, *Annals of Tourism Research* 35 (2): pp.574-595.
- Tourism Authority of Thailand. (2013) *Tourism Authority of Thailand: Tourism Statistics*.
http://www2.tat.or.th/stat/web/static_download.php?Rpt=ita (2013年4月19日閲覧)
- van Griensven, F. et. al. (2006) “Mental Health Problems Among Adults in Tsunami-Affected Areas in Southern Thailand”, *Journal of American Medical Association* 296 (5): pp.537-548.
- Walter, T. (1991) “Modern Death: Taboo or not Taboo?”, *Sociology* 25 (2): pp.293-310.
- Willmott, H. (2000) “Death for What? Sociology, Sequestration and Emancipation”, *The Sociological Review* 48 (4): pp.649-665.
- Wiseman, R., Watt, C., Greening, E., Stevens, P. & O’Keeffe, C. (2002) “An Investigation into the Alleged Haunting of Hampton Court Palace: Psychological Variables and Magnetic Fields”, *The Journal of Parapsychology* 66 (4): pp.387-408.